



労働と余暇の時間

梅村, 麦生

(Citation)

社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:176-177

(Issue Date)

2022-06-30

(Resource Type)

research report

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009426>



コラム7 労働と余暇の時間

梅村麦生

楽しい時間と退屈な時間では、同じ一時間でもまったく違う長さを感じる、とはよく言われる経験であるが、そうした時計の示す時間と体感される時間の差が現われやすいものとして、働いている日（学生であれば、学校で勉強をしている）の時間と、休みの日の時間との違いがある。

そもそも、組織で働くほとんどの人びとにとって、自分の労働力を売りに出し、その対価として時間当たりの給料を得ている。それは要するに、自分の時間を売りに出すことで、その対価として給料を得ている、ということに等しい。反対に近現代社会においては、特に現代のいわゆる消費社会において、まともに休日や休暇を過ごそうと思えば、一人であっても、家族や友人とであっても、その時間にお金をかけなければならない。そうだとすると、自分の時間を売りに出すことで得た金銭によって、自分の時間をまた買い戻している、とも言える（しかし一人ひとりが生きる時間は有限であり……というのが、ミヒヤエル・エンデ『モモ』の話でもあった）。

そうした時間の売り買いという側面も含めて、労働と余暇は相互に意義を規定し合う関係がある。お金はないが時間と体力はある大学生、お金はあるが仕事で忙しい勤め人、そして定年退職して年金で生活している人とは、休日の意義が大きく異なっているであろう。近代化・産業化が進む中であっては、まず労働時間が管理されたが（マックス・ヴェーバーが資本主義の精神のうちに見出した勤勉な生き方の指針とは、雇用者と労働者の関係から見ればまず「時間規律」に他ならない）、長時間労働をめぐる労働者たちの闘いや、機械化の進展あるいは産業構造の変化などによって労働時間が短縮されていくなかで、非労働時間としての余暇の時間が生み出されていった（参照、Thompson [1967]； Moore [1963=1974]）。

そして今日なお過労死や過労自殺が後を絶たず、いわゆるワーク・ライフ・バランスも問題となるなかで、余暇の時間や生きるための時間そのものに直結するものとして、人間としての尊厳を保ちうる「ディーセントな労働時間」の考えが提唱されている（参照、金野 2015）。さらに言えば、労働時間や生活時間における性差も、なお大きな問題であり続けている（参照、Hochschild [1997=2012]； 渡辺 [2016]）。自らの仕事や働き方、さらには生き方を見つめ直すうえでも、ひとたび立ち止まって振り返るための休息の時間は不可欠である。

文献

- Hochschild, A. R. [1997] *The Time Bind: When Work Becomes Home and Home Becomes Work*, New York: Metropolitan Books. (坂口緑・中野聡子・両角道代訳 『タイム・バインド——働く母親のワークライフバランス』明石書店, 2012年.)
- 金野美奈子 [2015] 「働く時間と個人の時間」小川慎一ほか編『「働くこと」を社会学する——産業・労働社会学』有斐閣, 205-227.
- Moore, W. E. [1963] *Man, Time and Society*, New York: Wiley. (丹下隆一・長田攻一訳 『時間の社会学』新泉社, 1974年.)
- Thompson, E. P. [1967] “Time, Work-Discipline, and Industrial Capitalism,” *Past and Present*, 38: 56-97.
- 渡辺洋子 [2016] 「男女の家事時間の差はなぜ大きいままなのか——2015年国民生活時間調査の結果から」『放送研究と調査』2016年12月号, 50-63.